

保育界

2014
12



発行 日本保育協会

狭くとも自然と触れ合える園庭へ — こびとの国幼稚園（ドイツ）—

公益財団法人 日本生態系協会
教育研究センター長 田邊龍太

子どもの思いやる心、命やものを大切にする心を育むためには、自然の恵みを生かした保育環境づくりが重要です。ここでは、そうした環境づくりを積極的にすすめる海外の事例をご紹介します。



『保育環境の充実に向けて様々な工夫を』 『保育者自身の自然に対する深い理解が欠かせない』

この園では、狭い敷地であっても、できるだけ園児に自然と触れ合わせたいと、園庭環境を見直しました。見直しにあたり、面積が必要な木の植栽は諦めて、野草を積極的に生やすことにしました。園舎やフェンスに沿いに草はらがつくられ、園児は日常的にチョウやバッタなどの野生の生きものと出会うことができるようになりました。

ただ、園長はこれで満足はしていません。どんなに工夫を凝らして自然いっぱいの園庭をつくっても、保育者自身に自然を楽しむ心、自然に対する正しい知識がなければ、自然の素晴らしさや大切さを園児に伝えることはできない、と考えています。そこで、保育者や当園で働くことを希望する学生に対して、まず自ら自然としっかり触れ合い、自然について理解を深めることを求めています。

■自然の保育力の活かし方 ～全国学校・園庭ビオトープコンクール2013より

昨年度に催しました「全国学校・園庭ビオトープコンクール2013」をもとに、自然を取り入れた環境づくりのポイントをまとめたパンフレット（A3判2つ折り）ができあがりしました。日本生態系協会ウェブサイトから無償ダウンロードできます。